

# 古墳出現期の北武蔵

## —前方後方墳成立の要因—

増田逸朗

### 1) はじめに

邪馬台国論争が盛んな今日、奈良県桜井市纏向古墳群の評価は、これを決する要素を十分持ち合わせている。というのは、ヤマト政権＝邪馬台国という図式によれば、最初の大型前方後円墳である箸墓古墳を取り巻くこの纏向古墳群中に、箸墓古墳に相前後する中型前方後円墳が確認されたことに起因する。このことから、前方後円墳が成立するに際し、『纏向型前方後円墳』（註1）から、より定型化された箸墓古墳が創出されたとすることができる。以後、3世紀後半から4世紀にかけて、大和盆地東南部の古墳群は、初期ヤマト政権の中枢部を担うこととなる。

さて、この東南部の大和古墳群中に下池山古墳を含む数基の前方後方墳が存在し、これが、濃尾平野を中心とした勢力との関係で取り沙汰されている。ここに、かつて卑弥呼に対峙した狗奴国がクローズアップされることになる。

前方後方墳の成立に関しては、濃尾平野が有力視され、東国の古墳成立にこの場所が深く関与していたことは、東国最初の古墳が前方後方墳であることから容認されている。本稿で扱う「前方後方墳成立の要因」の意義がここに存在する。

さて、東国の古墳出現以前の墓制としては再葬墓、土坑墓、壺棺墓、方形周溝墓などがある。この内方形周溝墓は、古墳に連なる墳墓として期待されてきた。

埼玉県では、1955年に大宮公園内遺跡（註2）が調査されたが、当時は住居を廻る環溝と理解されていた。続いて、1963年に庄和町で権現山遺跡（註3）が調査されている。さっそく、この遺跡を台地研究に報告した横川好富氏は「高塚古墳が伝播し、築造される以前の墳墓形態」と結論付け、その性格をいち早く分析し、後の研究の指針とした。この翌年、八王子市宇津木遺跡（註4）で連結する4基が発掘され、1965年に大場磐雄氏により「方形周溝墓」の名が提唱された。しかし、この際も、墳墓としての性格付けは曖昧なものであった。

埼玉考古学会は、1969年に埼玉考古7号「埼玉の方形周溝墓」を編集し、この中で「埼玉の方形周溝墓をめぐる問題点」と題し、全国に先駆けて古墳以前の墓制に取り組んでいる。内容は、立地・分布・形式・形態・編年と多岐に渡って討論されたが、埼玉県最古の古墳を円墳である熊野神社古墳とし、5世紀初頭と認識していたため、古墳成立との関係を詰めるには至らなかった。

この間、1978年、岡部町石蒔B遺跡（註5）で前方後方型周溝墓が調査され、これが方形周溝墓群の中に群在することが明らかになった。これをうけ、1981年、坂本和俊氏は、山の根古墳を前方後方墳ではないかと指摘している（註6）。

埼玉県における前方後方墳の最初の発掘は、埼玉県史編纂室の「埼玉の古式古墳調査」による諏訪山29号墳（註7）であり、これは1984年のことであった。その後、県立さきたま資料館による「古墳詳細分布調査」の成果が加わった。

この様に、1970年以降は埼玉県域の3～4世紀代の墳墓に、方形周溝墓・前方後方型周溝墓・前

方後方墳・前方後円墳・方墳・円墳が存在することが判明し、出現期古墳の実態を解明する資料も整ってきた。これらの成果を受け、前方後方型周溝墓と前方後方墳の諸要素を分析し、北武蔵における階級社会成立の実態に迫ってみたい。

## 2) 遺構の概要 (表1・1図)

鷲山古墳 (児玉町下浅見字鷲山) (註8) 小山川中流域左岸の独立丘陵最上部に構築され、東西に開ける水田面からの比高12mを測る。この丘陵は南北約500m、東西150mの「く」の字形を程する小丘陵とはいえ、最上部に占地することで大きく主軸方位を制約される程の地形ではない。前方部南側には30m程離れて、径10mの墳丘の高まりが見られ、付近から古式土師器片が確認されている。

墳丘規模は、全長58.4mで、後方部は主軸長が僅かに長い形態を示す。前方部端はバチ形に開き、この延長線上は括部中央で交わる。また、括部から発する前方部延長線上は後方部中央で結ばれるようである。なお、前方部東側は調査が不十分であったが、ここの墳丘のコンタを読みとると、左右対称を成し、築造に際しては企画性の高い古墳とされる。

遺物としては、西側括部から、口縁に6対12個の円形透かしを持つ壺形土器と埴形土器が出土している。両者共に底部を焼成前に穿孔しており、壺外面には赤彩が見られ、いかにも儀器的様相を呈している。加えて、この括部には段状の張出しが有り、葬送儀礼の場を彷彿とさせる。また、墳頂部からは、二列の竹管文を持つ手焙形土器片が古くに表採されており、これが古墳に伴うものとするれば、遺構の性格や時期さえも限定できる。

主軸方位N-25° - E、後方高5.4m、前方高1.5m。

山の根古墳 (吉見町久米田) (註9) 吉見丘陵の東端尾根上に立地し、沖積地からの比高は12mを測る。位置的には、東京湾から入間川、市の川を遡ると、比企丘陵への先ずの到着点にある。古墳は東側面を崖面に接するとはいえ、主軸方位を規制される程の地形ではない。付近には、本古墳の後方部北西35mに、長辺28m、短辺22mの方墳である山の根2号墳が、対をなすようにある。調査の結果、周堀については、墳丘盛土を獲得するため白色粘土層まで削り出した地山整形面は確認できたが、外側立上り面は一部の調査のためか検出できなかった。

墳丘規模は全長54.8mで、後方部の長辺33.6m、短辺26.2mの長方形を示し、前方部の側線は後方部中心で交わるようである。墳丘の基底部からの高さは、後方部が3m、前方部が1.9mとなる。

遺物としては、西側括部から墳丘裾部平坦面に並べられたように甕4・鉢1・高坏1の計6点の土器が検出されている。うち、鉢と高坏は完形品で、とくに高坏は元屋敷式土器の範疇に属し、当墳の時期を限定できるものである。

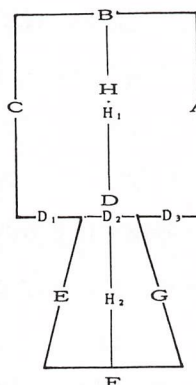
主軸方位N-23° - E、

天神山古墳 (東松山市柏崎) (註10) 五領遺跡と同一の東松山台地上にあり、眼下に東流する市の川を臨み、これを挟んで山の根古墳を遠望できる位置にある。沖積地からの比高は12mを測り、北側は崖面をなし、東側には緩やかな谷が形成されているが、古墳の方位を規制する程の地形的制約はない。付近には古墳時代前期を含む番清水遺跡があり、ここからは一辺20mを測る最大級の方形周溝墓が検出されている。なお、調査では複合口縁壺形土器片が、そして古くに仿製内行花文鏡

表1. 遺構部位計測値表

(遺構名)	A	B	C	D	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	D <sub>3</sub>	E	F	G	H	H <sub>1</sub>	H <sub>2</sub>	面積
1 鷺山古墳(児玉町)	36.5	35.5	38.0	35.5	13.0	8.2	13.0	22.0	20.0	22.0	58.8	37.0	21.4	1822㎡
2 山の根古墳(吉見町)	33.6	26.2	33.6	26.2	8.5	9.2	8.5	21.1	19.2	21.1	54.8	33.6	21.2	1173㎡
3 天神山古墳(東松山市)	37.5	37.5	37.5	37.5	12.0	13.5	12.0	21.0	21.5	21.0	(59.0)	37.5	21.5	1751㎡
4 諏訪山29号墳(東松山市)	27.8	24.0	28.4	24.0	8.4	7.5	8.4	23.0	19.5	23.0	51.0	28.0	23.0	970㎡
5 塚本塚山古墳(浦和市)	34.0	34.0	34.0	34.0	11.5	11.0	11.5	18.4	22.2	18.4	(52.0)	34.0	17.0	1464㎡
6 塩1号墳(江南町)	20.8	20.0	20.6	20.0	7.2	5.1	7.2	14.2	11.8	14.2	35.3	20.8	14.5	538㎡
7 塩2号墳(江南町)	17.6	20.0	17.6	20.5	8.0	4.5	8.0	13.0	11.0	12.5	30.0	17.5	12.5	459㎡
8 権現山2号墳(上福岡市)	21.0	20.5	21.0	20.5	7.0	6.5	7.0	13.5	9.0	13.5	(34.0)	21.0	13.0	570㎡
9 三ノ耕地1号墓(吉見町)	25.7	23.8	25.7	21.0	6.9	7.2	6.9	22.5	15.3	22.5	48.3	25.7	22.5	864㎡
10 三ノ耕地2号墓(吉見町)	19.0	15.4	19.0	15.0	3.8	7.5	3.8	12.0	9.0	12.0	31.0	19.0	12.0	413㎡
11 南志渡川4号墓(美里町)	14.6	17.0	14.8	15.8	7.2	3.8	5.0	12.0	15.6	10.6	25.0	14.6	11.0	319㎡
12 村後墓(美里町)	14.3	17.0	14.3	17.0	6.5	4.0	6.5	9.0	9.5	9.0	23.0	14.3	8.7	306㎡
13 石蒔B8号墓(岡部町)	15.2	13.0	15.5	13.2	5.4	2.6	5.2	6.5	6.6	7.8	23.2	16.2	7.0	262㎡
14 中耕42号墓(坂戸市)	17.0	12.7	17.0	13.5	8.5	2.5	2.5	12.0	6.0	11.0	28.5	17.5	11.0	260㎡
15 下道添2号墓(東松山市)	14.5	12.0	14.5	12.0	4.0	4.0	4.0	7.5	8.0	7.5	22.0	14.6	7.4	223㎡
16 塚本山38号墓(美里町)	14.8	13.0	14.0	15.0	4.0	2.0	9.0	3.5	0.8	3.5	17.8	14.0	3.8	182㎡
17 塚本山14号墓(美里町)	15.2	14.0	15.0	13.8	5.0	3.8	5.0	3.0	4.0	5.2	20.5	15.0	5.5	233㎡
18 塚本山33号墓(美里町)	13.5	14.0	12.0	13.8	4.6	2.3	6.9	6.2	5.2	5.5	18.0	12.6	5.4	198㎡

遺構部位名称



$$D_1 + D_2 + D_3 = D$$

$$H_1 + H_2 = H$$

■ 推定値

片・銅釧(註11)が出土したとされている。

規模は、前方部が未調査のため定かでないが、墳丘の残存状況から全長59m程と推定した。後方は調査結果からすると、一辺37.5mの正方形となる。前方部のコンタからすると、この延長線上は後方部北辺中央で結ぶものとされる。周堀は、西側括部で切れるようで、ここにブリッジが想定される。全長59.0m、主軸方位N-19°-W、後方高4.0m、前方高?。

諏訪山29号墳(東松山市大字西本宿) 都幾川右岸の高坂台地北縁辺部にあり、沖積地からの比高5mを測る。このため、都幾川を眼下に臨み、対岸の東松山台地に立地する大型前方後円墳の野本將軍塚古墳を遠望することができる。付近には、前方部に接して、本墳と同一主軸方位を持つ、全長61mの前方部未発達の前円墳諏訪山古墳が存在し、埴輪が採集されていないことや墳形から、初現期の前方後円墳と推測されている。また、後方部延長線上の約100mには、埴輪を持たない浅間神社古墳が存在する。

古墳の規模については、前方部に調査が及んでいないことと、北半分が削平されているため定かでない。しかし、後方頂の残存状況から中軸線を想定し、括部のトレンチから前方部の開きを推定した。全長は、崖面に見られた落ち込みを重視すれば全長51.0mに、盛土の裾を重視すれば45m程になる。これらによれば、後方部は主軸線に沿った長方形と想定される。

遺物としては、後方部南面に通じるブリッジ付近から土器が見られた。後方部裾に、頸部に凸帯を廻らす焼成前穿孔の壺形土器、肩部以下を打欠いた大廓式土器、ブリッジ中央から埴形土器、ヘラ磨きを施した器台などがあり、ここに土器が集中している。土器の組成としては壺・埴・器台が目立ち、墓前祭祀的性格が顕著である。

全長51.0(45.0)m、主軸方位N-42°-W、後方高3.6m、前方高1.6m。

塚本塚山古墳(浦和市塚本内東)(註12) 荒川下流域の鴨川左岸の自然堤防上にあり、沖積地からの比高1mを測る。当古墳は、大久保古墳群に属し、群内の大型円墳塚山古墳からはB種ヨコハケ埴輪が検出されている。古墳群は、少なくとも5世紀前半には構築され始めたことが、現時点

でも確認できる。本墳は、残存する墳丘からのみの推定であるが、墳頂部平坦面を参考に中軸線を想定すると、全長52mで、後方部は34mの正方形と推定される。しかし、後方部が5.5mと高く、自然堤防上に構築されていることから、全てを盛土と考えざるをえず、該期前方後方墳としては多少の違和感も残る。全長52.0m、主軸方位N-56°-E、後方高5.5m、前方高？

塩1号墳（江南町塩字狸塚）（註13） 山の根古墳の眼下を流れる市の川の支流、滑川の上流左岸に位置し、沖積地からの比高15mを測る比企丘陵南縁にある。形態は、後方部が正方形で、この中軸線上に前方部が位置し、側線は後方部中央で交わり、極めて幾何学形のプランを示す。後方部の後方には群内最大の方墳がある。周溝からは、口縁に円孔を穿つ有段口縁壺が発見されている。

全長35.3m、主軸方位N-37°-W、後方高4.2m、前方高1.2m。

塩2号墳（江南町塩字狸塚）（註14） 1号墳の南側に位置する。形態は後方部が短辺17.6m、長辺20.0mの横長を示す。前方部右側辺は後方部に直交し、左側辺は中軸線中央1/2で交わる。遺物としては、複合口縁壺・鉢形土器が出土している。なお、本墳の前方部に接して一辺11mの方墳が存在し、他にも方墳25基が群内に確認されている。全長30.0m、主軸方位N-45°-W、後方高2.8m、前方高1.0mであるが、墳丘裾から1.5mまでは旧表土を削出し、墳丘としている。

権現山2号墳（上福岡市滝）（註15） 眼下を東流する新河岸川右岸の入間台地縁辺部にあり、北側に広がる沖積地からの比高7mを測る。遺構の調査は一部で、全容は不明な部分が多い。現在残る墳丘コンタから中軸線を割出し推定すれば、全長34.0mで、後方部辺21m、前方部側線は後方部中央で交わる様である。2号墳には後方部辺に並列して一辺15m程の1号方形周溝墓が隣接している。

遺物としては、焼成前穿孔の有段口縁壺・パレス壺・高坏がある。群構成としては、2号墳の前方部に隣接して一辺15m程の方墳が見られ、さらに、付近にはこれより小型の方形周溝墓5～6基が確認されている。

全長34.0m、主軸方位N-24°-E、後方高2.4m、前方高0.2m。

根岸神社古墳（東松山市古凍字根岸）（註16） 松山大地の南東部端に位置し、沖積地からの比高5mを測り、東に川島町の低地帯を遠望できる。同一台地上には下道添2号墓を含む古凍古墳群が存在する。特筆すべきは、眼下に開ける川島町正直の地に北陸系の集団と関係が深いとされる正直玉造遺跡が発見されている。

現墳形は、長辺13m、短辺10mに整然とコンタが巡り、ここより3m離れて周堀が検出されている。コンタから推定される主軸はN-6°-Eを示し、方墳としての方位観に合致する。あえて前方後方墳として想定すれば、前長26.6m、後方部の長辺17.8m、短辺15.0mと推定される。

遺物としては、在地の吉ヶ谷系の壺型土器と土師器壺形土器が見られ、前者は焼成後に穿穴され、後者は焼成前であり、両者の違いが注目される。後方部高1.6m、前方部高？

南志渡川4号墓（美里町駒衣字南志渡川）（註17） 利根川の支流である小山川右岸の平地にあり、沖積地からの比高1.5m程を測る。平面形態は、後方部東辺が長い台形を示し、前方部前面は、右側にブリッジを持ち左側がやや張る特徴を示す。後方部中央に中軸線を設けると、前方部右側線は方台部中央に、左は手前1/2にその交点を求めることができる。

遺物としては、周溝内よりパレス壺・鉢・小型壺形土器が検出されている。なお、調査区内からは、4号墳を除き9基の方形周溝墓が発掘されており、四隅の切れる小型、一周する中型、4号墳の後方部と同様な台形を示す大型のものが見られる。全長25.0m、主軸方位N-61°-W。

村後墓（美里町下茂田字村後）（註18） 南志渡川4号墓より下流の小山川右岸の自然堤防上にあり、一部が調査されている。形態復元に当って、括部の一定の幅を考慮すると、横長の後方部とならざるをえない。残存する溝底は決して深くはないが、前方部を区切る溝は、幅こそ狭いが深く掘削されている。形態は、方台部を一周し、前方部右側にブリッジを有するものと推測される。

遺物としては、装飾壺・器台・埴・高坏・台付甕・S字状口縁台付甕が見られる。

全長23.0m、主軸方位N-70°-E。

石蒔B8号墓（岡部町後榛沢字石蒔） 村後墓より下流の小山川右岸の自然堤防上にあり、沖積地からの比高1mを測る。調査区内には12基の方形周溝墓が検出されている。8号墓の形態は、縦長な長方形を示し、前方部右側にブリッジを有し、括部はほぼ中軸線を対称にするが、前方部側面は、右側が方台部中央に、左側がこの1/2で交点を持つ様である。

全長23.2m、主軸方位N-54°-E。以下の分析の項参照。

下道添2号墓（東松山市古凍字下道添）（註19） 松山台地上の古凍古墳群内にあり、沖積地との比高10mを測る。後方部と同一規模を示す方形周溝墓を含め、多くの周溝墓で構成されている。形態は、前方部の溝が不明であるが、調査されたこの張出し形態から、全長22.0mで、後方部は短辺を12m程とする。長方形を想定した。これは、張出し形態の他の類例からしても括部幅が最も良く収まる配分である。

遺物としては、各溝から壺形土器を中心に高坏・器台を含め多くの土器が見られた。複合口縁の壺形土器を除き、他は全て焼成前の穿孔である。全長22.0m、主軸方位N-41°-W。

塚本山38号墓（美里町下児玉字西山）（註20） 小山川左岸の大久保山丘陵南面に立地し、眼下に小山川と美里の平野を一望できる位置にある。沖積地との比高は14mで、方形周溝墓としては最も高位にある。遺物としては、有段口縁壺・単口縁壺・焼成前穿孔の装飾壺・埴形土器が見られる。遺構の形態は、方台部は台形で、ブリッジは極端に左に寄り、この形態も外に開くものではない。これよりすれば赤塚氏のB1型（註21）とするのは困難かもしれない。一応ここでは、B1型の初現期のものとしておく。

全長17.8m、主軸方位をS-30°-E。

塚本山14号墳（美里町下児玉字西山）（註22） 38号墓の下位斜面の比高10mにある。形態は、西側にブリッジを持ち、この両側は左右非対称の掘方を成すが、左側辺の延長線上は方台部中央部で結ばれる。また、ここには主軸に沿って長辺3.7m、短辺1.0mのローム檜とも見られる埋葬施設があり、鉄剣と鉄鏃が出土している。さらにこの第1主体部に直交して第2主体部が構築されている。これからすると、長方形の方台部中軸を基準に主体部とブリッジが設置されていたことが予測される。周溝からは、2段に円孔を有する完形の高坏や壺・甕形土器が出土している。

全長20.5m、主軸方位をS-72°-Eを示し、かなりの斜面ながら1.0~0.75mの盛土が認められる。

塚本山33号墳（美里町下児玉字西山）（註23） 14号墳の下位、斜面の比高5mにある。形態は、

方台部はやや台形で、北辺に位置する括部は辺のやや左に寄る。この偏在した右張出しの辺は、方台部中軸線上にある。右張出し部の位置と方台部の形態や括部の偏在位置は、14号墳と共通した要素といえる。遺物としては、在地系の複合口縁壺・高坏形土器が出土している。

全長18.0m、主軸方位をS-12°-Eを示す。なお、南溝中に長辺2.0m、短辺0.85mの土坑が検出されている。

### 3) 分析と若干の考察

\*石葺B遺跡の分析(1図・表2) 遺構の配置は、単独で方位を異にする12号墓と溝を接する1~11号墓に分かれる。規模(方台部面積)は、5号が25mとやや小さく、53~64mの小型が2・4・6・7・9号、80~107m中型が3・10・11号、225~262m大型が1・8・12号である。形態は、5号を除いて溝は全周し、正方形が1・9・11号、台形が2~7号で、この中には、平行する二辺を縦にするもの3・4・6号と横にする2・5・7号がある。長方形は8・10・12号で、8号は前方後方型周溝墓で、12号は、A辺が8号B辺の長さに近似することから、主軸を8号と直角にとる前方後方型周溝墓とも推定される。

方位は、正方形の1・11号が3度、台形の横の2・7号が2度、縦の3・4・6号が3度、長方形の8・10号は0度の違いで収まり、形態と方位が有機的関係にあることがわかる。

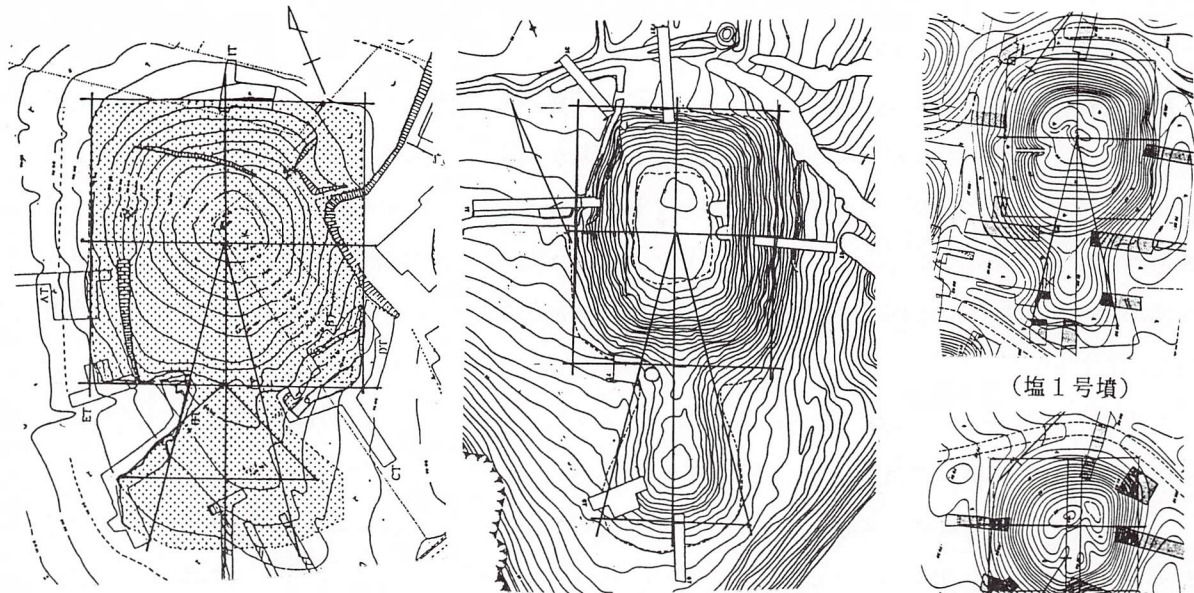
遺構の新旧関係は、隣接する溝の形態からも予測される。2号は1・4号を避けており、6号も4号を避けている。10号は8・9・11号構築後に掘削していることがわかる。8号と9号との関係は、隣接し主軸方位が一致することと配置から、極めて近い時期に対として構築されているようである。

出土遺物としての土器は、11号からパレス壺がある。複合口縁に刻目があり棒状浮文を有し、肩部に波状文が施文され、焼成前の底部穿孔がある。次の3・4・7号に欠山系譜の口縁が内湾し、端部がシャープな仕上がりで、ヘラ磨きの丁寧な仕上げの壺形土器がある。8号からは前者に近似した造りで、体部肩がやや張り、底の上がる埴形土器がある。1・6号からは8号より下る体部球形の埴形土器がある。さらに、10号からは、体部が深く、ヘラ削りを施す新しいタイプの埴形土器が見られる。一応、土器論からは11号→3・4・7・8号→1・6号→10号の順で時間軸が追える。

表2. 石葺B遺跡遺構測定値

遺構名	A辺	B辺	C辺	D辺	面積	方位	形態
1号墓	15.2m	13.5m	15.5m	14.4m	225m <sup>2</sup>	N-35度-E	正方形
2号墓	7.0m	8.3m	6.5m	7.5m	53m <sup>2</sup>	N-47度-W	横長台形
3号墓	10.0m	8.5m	9.1m	7.9m	80m <sup>2</sup>	N-40度-E	縦長台形
4号墓	7.9m	6.4m	8.5m	6.5m	55m <sup>2</sup>	N-37度-E	縦長台形
5号墓	5.1m	5.5m	5.0m	4.6m	25m <sup>2</sup>	N-32度-E	縦長台形
6号墓	9.6m	7.0m	7.8m	7.1m	64m <sup>2</sup>	N-37度-E	縦長台形
7号墓	7.4m	8.7m	7.0m	8.5m	64m <sup>2</sup>	N-45度-W	横長台形
8号墓	15.7m	13.8m	15.9m	13.0m	205m <sup>2</sup>	N-50度-E	縦長長方形
9号墓	7.2m	7.1m	7.4m	6.9m	56m <sup>2</sup>	N-49度-E	正方形
10号墓	11.4m	9.4m	11.7m	9.2m	107m <sup>2</sup>	N-49度-E	縦長長方形
11号墓	10.3m	9.5m	10.3m	8.8m	98m <sup>2</sup>	N-33度-E	正方形
12号墓	13.3m	(16.0m)	?	?	(235m <sup>2</sup> )	N-49度-W	縦長長方形

( ) 推定値

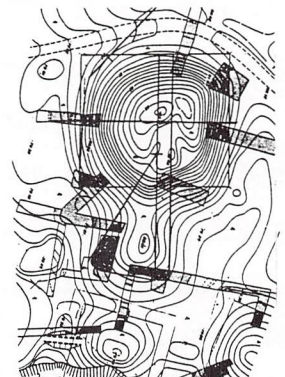


I類 (山の根古墳)

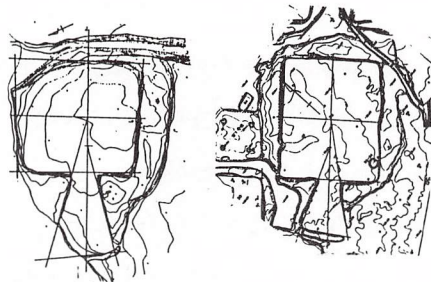
0 20m

(鷺山古墳)

(塩1号墳)

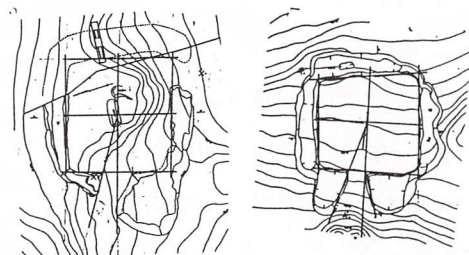


II類 (塩2号墳)



III類 (南志波川4号墓)

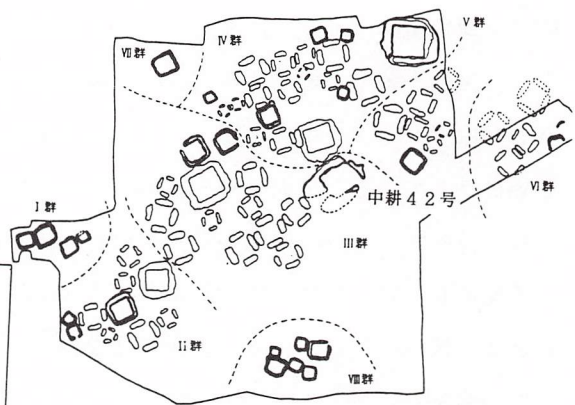
(石蒔B8号墓)



IV類 (塚本山14号墓) (塚本山33号墓)



石蒔B遺跡遺構分布図



中耕・広面遺跡方形周溝墓分布図

(分布図縮尺不同)



広面9号

広面遺跡

1図 遺構及び分布図

ここに東海の編年を対応させると11号を廻間Ⅱ～Ⅲ式に、3・4・7・8号を廻間Ⅲ式前半に、1・6号を廻間Ⅲ式後半・元屋敷（中）とすることができる。（註24）

以上の諸事実からすれば、規模から最低3段階の階層差を、形態と方位から3～4の系譜や出自を、そして、配置や土器論から各層3世代に渡り墳墓を構築したものと理解できる。前方後方型周溝墓の群内における出現については、形態と主軸が異なる11号が前方に構築されている事実がある。8号の埴は1・6号より古い、11号のパレスとはなかなか比較が困難である。8号を避けて同一系譜の10号が構築されていることから、最終段階で発展的に前方後方型周溝墓が構築されたものではないらしい。

\* 中耕・広面・稲荷前遺跡（註25）の分析（1・2図） 越辺川右岸の自然堤防上に立地する3遺跡は隣接し、中耕・広面遺跡は、同一のものとも考えられる。

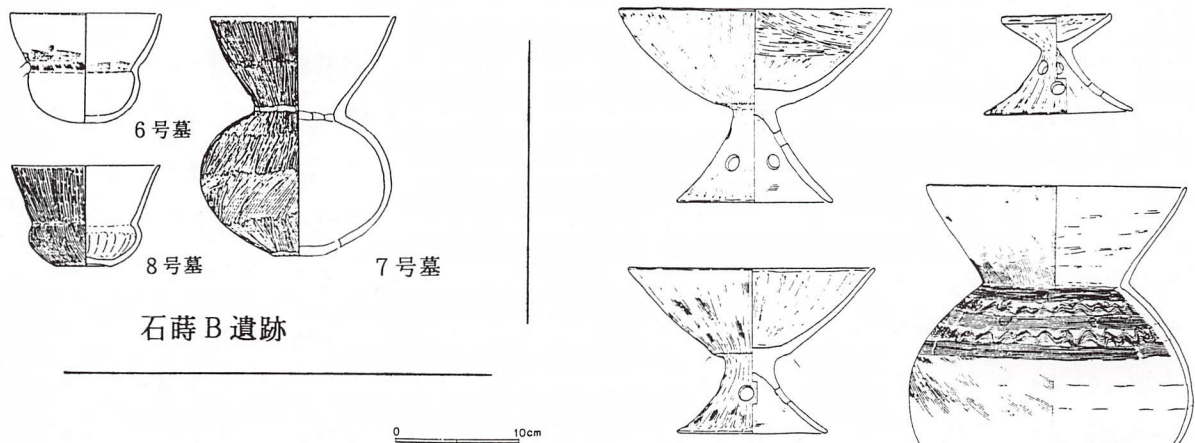
3遺跡の方型周溝墓は、A類＝長いブリッジを持つ大型3基、B類＝溝が一周する大型20基、C類＝同小型41基、D類＝四隅の切れるもの60基の合計124基から成る。それぞれの規模は、A類の稲荷前B5号が184㎡、中耕42号が260㎡、広面9号が451㎡とブリッジを持つ大型のものでもその占有面積に差がある。B類は、最小が72㎡、最大が250㎡、平均的なものが132㎡である。C類は、最小が20㎡、最大が89㎡、平均的なものが60㎡である。D類は、最小が17㎡、最大が130㎡、平均的なものが90㎡である。これら占有面積から言えることは、B類でも大型のものはA類の小型なものを凌駕し、C類とD類にあっては、最大・平均値ともD類が大きいことがわかる。これよりすれば、A類→D類への単純な階層差として理解することはできない。これまた、それぞれの集団の系譜や出自にかかる墓制の選択とすることができよう。このことは、中耕63号～68号がC類のみで独立して占地し、D類も遺構が規則的に配置され、一定空間を占有していることから明らかである。

A類の形態的特徴は、稲荷前B5号が極めて狭いブリッジを北に開き、広面9号は長方形の方台部を持ちながらブリッジを中央に築くことなく、中耕42号は一見前方後方型を呈しながらブリッジを南に寄せ、左右対称的企画性が見られない。ちなみに、後に述べるように、比企郡では既に吉見町三ツ耕地遺跡（註26）に典型的な前方後方形が出現している。さて、これら諸現象から言えることは、後に土器でも触れるが、極めて在地色の強い集団の墓制として理解できそうである。稲荷前B5号はブリッジを中央に築くことを知りながらB2型を採用せず、その方位までも稲荷前遺跡のB類に準じている。広面9号や中耕42号もC類やD類の方位に従い、墓道の方位や位置も変則的で、これが意味する独特の葬儀が執り行なわれたものと推測される。

遺跡の年代は、D類の中耕32号墓に3孔2段透かしと4孔1段透かしの高坏、北陸系の装飾器台がある。器台は坏に三角形、脚部に2段透かしを持ち大きく開く形態を示す。4孔1段透かしの高坏が口縁端部に弱いとはいえ稜線を持つこと、3孔2段透かしの坏と脚部の比率、器台の特徴からすれば廻間Ⅱ式4に比定することができる。また、A類の中耕42号墓からは、3孔2段透かしの装飾器台2点に、3孔透かしの高坏があり、32号に比べて坏部が内湾せず直線的に開き、深さも浅くなっており、脚部は張ることはなく大きく開くものである。これより、廻間Ⅲ式2（布留1式）に比定できる。

土器としては、A類～D類まで在地系の吉ヶ谷式土器を伴出する。特にD類にはこれが目立ち、





6号墓

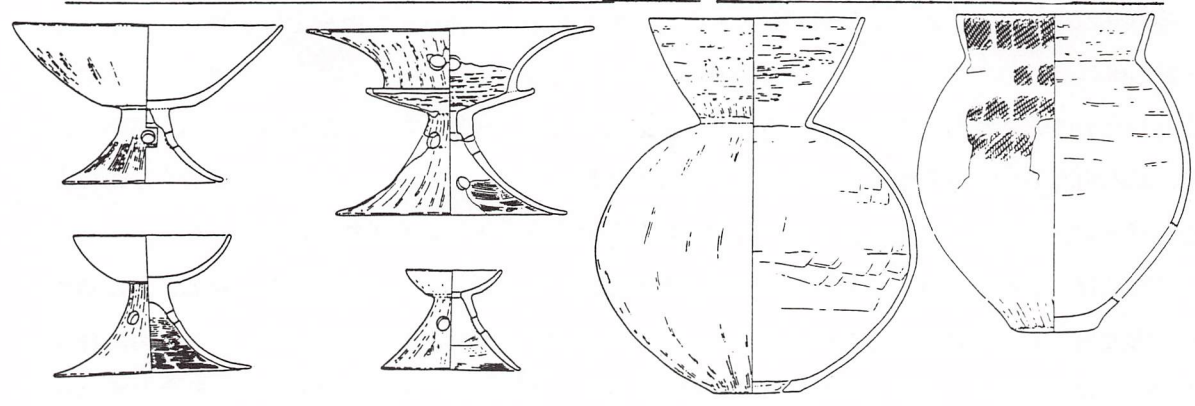
8号墓

7号墓

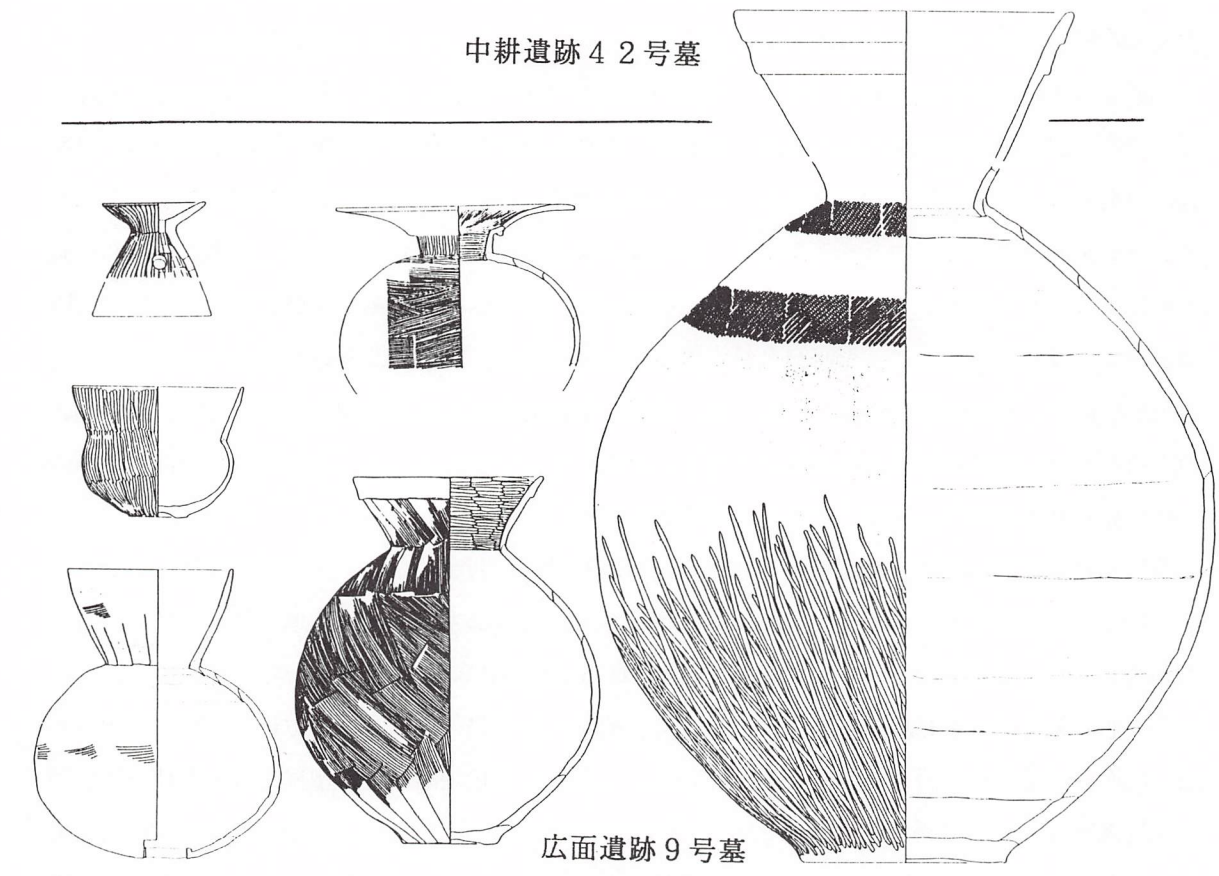
石蒔B遺跡

0 10cm

中耕遺跡3 2号墓



中耕遺跡4 2号墓



広面遺跡9号墓

2図 遺構出土土器図

A類の中耕42号墓からも最後の形骸化した吉ヶ谷式土器の甕が伴っている。D類を含め、東海系の土器をこれほど供献しながら、在地系の吉ヶ谷式土器にこだわるのが本遺跡群の特徴といえる。底部穿孔土器は、広面9号墓を除いて全て焼成後の穿孔である。広面9号墓のものは、全て小型壺で、造出し・コーナー・ブリッジからの出土であり、土器外面の削り手法からして新しくされるものである。これよりしても、A類は群構成の中で新しく出現するものと考えられる。いずれにしろ、群構成にあつてはD類を嚆矢とし、B・C類の出現をみて、A類が成立したものと推測される。

\*群構成と墳形の企画性(表1・1図・3図) 北武蔵の遺跡は、立地と分布から、I類=前方後方墳、前方後方墳+方墳(1~5)、II類=前方後方墳+方墳+方墳…(6~10)、III類=前方後方型周溝墓+方形周溝墓+方形周溝墓…(11~14)、IV類=B1・B2型方形周溝墓+方形周溝墓+方形周溝墓…(15~18)のように分類できる。以下、諸特徴からその企画性を抽出してみたい。

後方部の平面形は、A辺>B辺の長方形が一般的である。主体部を中軸線上に埋葬しようとする意識が働けば当然のことである。これに対し、A<Bの横長の形態は、初めから並置することを目的としたものとされる。後者には、塩2号、南志渡川4号、村後、塚本山33号があり、南志渡川4号、塚本山33号は、取り巻く方形周溝墓が同様の形態を示すことから、この伝統下に成立した後方部の形と考えられる。A<BはII類~IV類には見られるが、少くともI類には存在しない。

後方部はAとCが並行し、B>Dで括部辺がやや短いものが多い。これに対し、III類、類に属する南志渡川4号、中耕42号はこの逆である。不正台形をするものに南志渡川4号、中耕42号、塚本山14号、塚本山33号、塚本山38号があり、IV類に多く、III類にも一部確認される。これよりすれば、後方部の平面形は、IV類→I類に向かって長方形化が整っていったものと理解できる。

括部は通常D辺の中央に取り付ける。III類の南志渡川4号は左に寄せ、IV類の中耕42号は右に寄せている。同一遺跡と考えられる広面9号墓が、極端に左に取り付けている。このことから、中耕遺跡の集団は、在地の伝統的思考のもとに、中央主体部への邪気の直接的侵入を防ぐため、中央のブリッジを避けているものと考えられる。前方部の左右対象でないものがある。左側に前方部を張出すE>Gのものに塩2号、南志渡川4号、中耕42号、塚本山33号があり、塩2号はGがD辺と直角を成す。また逆なものに、石蒔B8号、塚本山14号がある。さらに、前方部ブリッジが右開きと左開きがあり、多種多様である。これらは、在地の伝統的墓制にある葬列の進行方向等、葬送儀式の規範のもとに設計された遺構形態とすることができる。いずれにしろ、この種のものは、II類の一部に見られるものの、III類、IV類に多く確認される。

墳形の設計に当っては、前方部のE辺とG辺の取り付けが問題になる。EとGの延長と中軸線の交点によって分類すると、Bとの交点に結ばれるものに天神山古墳・三ノ耕地1号・2号がある。石蒔B8号は、Eが中央1/2に、Gは中央で結ばれる。塚本山33号はEが中央で、GがDに当たっている。他の全ては、中軸線の中央に交点を置く。要は、前方部の発達した前方後方墳は、奥辺(B辺)に取り、前方部の開きを緩やかにしている。しかし、III類の前方後方型周溝墓やIV類のB2型方形周溝墓は、前方部が短いことにより、中央に前方部の非対象性からくる中央1/2交点が生じてくる。IV類からI類へと規格化が進むが、III類、IV類にあつては固定化された設計図のようなものはなく、II類においてさえ、伝統的在地的墓制に規定された不規則なブリッジなどの遺構構造を示

している。

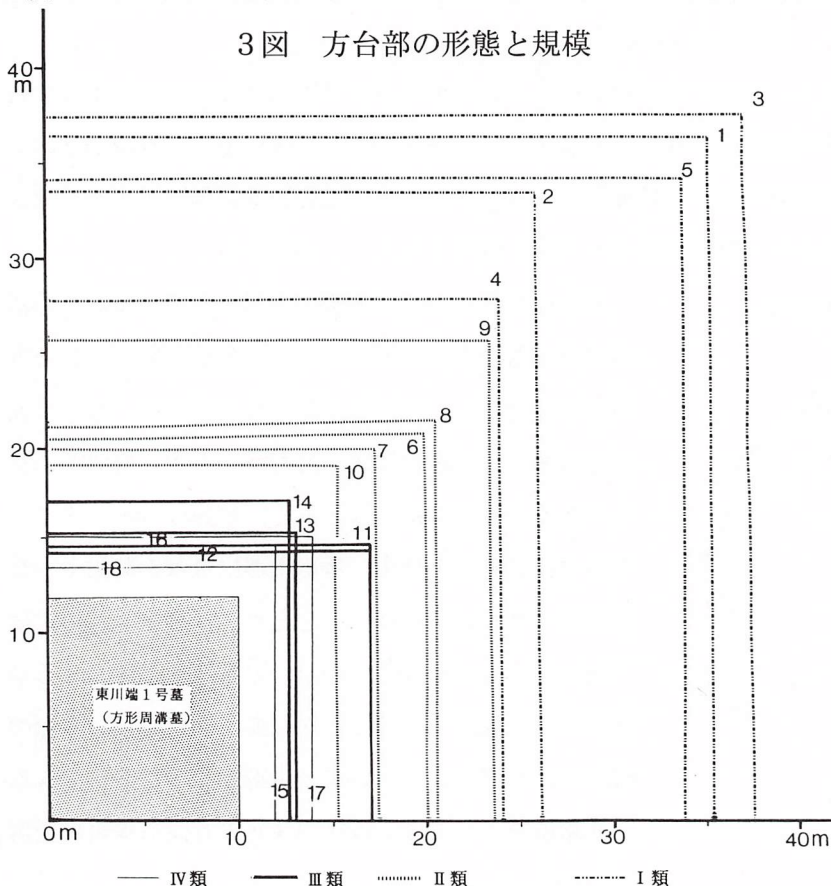
\*遺構の規模（3図） I類～IV類の全長・面積・盛土量を数値表を参考にまとめると、以下のようになる。ただし、盛土量はI類が山の根古墳、II類が塩1号墳と権現山2号墳の平均値、III類は墳丘が残るものはない。IV類は塚本山14号墓の計測値である。

	(全長) 最大	最小	平均	(面積) 最大	最小	平均	(盛土量)
I類	58.8m	51.0m	55m	1822m <sup>2</sup>	970m <sup>2</sup>	1436m <sup>2</sup>	1690m <sup>3</sup>
II類	48.3m	30.0m	36m	864m <sup>2</sup>	413m <sup>2</sup>	569m <sup>2</sup>	415m <sup>3</sup>
III類	28.5m	23.0m	25m	319m <sup>2</sup>	260m <sup>2</sup>	287m <sup>2</sup>	—
IV類	22.0m	17.8m	20m	233m <sup>2</sup>	182m <sup>2</sup>	209m <sup>2</sup>	160m <sup>3</sup>

これらから読み取れることは、I類とII類との全長の差は1.5倍、面積は2.5倍、体積に至っては実に4.1倍を示す。さらに、I類とIII類は、全長の差は2.2倍、面積は5倍を示す。そして、I類とIV類に至っては、全長で2.8倍、面積は6.9倍、体積に至っては実に10.6倍を示す。ちなみに、世帯共同体の有力家長層の墳墓とされる方形周溝墓、東川端1号墓(12.0×10.0m)の盛土は104m<sup>3</sup>であり、これとI類との差は実に16.1倍に達する。ここに、族長層を越えた首長の姿を見ることができ

る。  
\*前方部の発達度 後方部長に占める前方部長の割合= $H_2 / H_1$  (表1) は1 : 2を50%とする。I類は、未調査の塚本山古墳を除くと57~63%となり、山の根古墳の前方部が最も発達している。II類は、三ノ耕地1号の88%が最も発達している。塩1・2号とも70%であるが、塩2号の横長後方部長に対すれば58%を示し、権現山2号の62%と共にI類の数値に近似する。III類は、南志渡川4号の75%の数値が高く、石苺B8号の43%とその数値の開きが大きい。IV類は、51%~27%

3図 方台部の形態と規模



%とバラツキが大きい、塚本山に関しては43%~27%と、前方部の未発達の様子が窺える。

前方部の発達度は、I類では比較的安定した数値が得られるのに対し、III類・IV類での開きが大きい。前方後方型周溝墓から前方後方墳が発達するのであれば、三ノ耕地1号や南志渡川4号の数値の前方後方墳が存在してよいはずである。しかし、これらの遺跡に近い鷲山古墳や山の根古墳で

はこれより25～17%低い数値である。もっとも、三ノ耕地1号に続く2号は63%と、山の根古墳と同値である。

\*遺構の主軸方位（4図） I類は、N-25° - Eの鷲山古墳、N-23° - Eの山の根古墳、N-19° - Wの天神山古墳、N-42° - Wの諏訪山29号墳があり、比較的北位を意識した主軸を持つ。時期不明の塚本塚山古墳を除くと、北を中心に67度の範囲に収まり、これはII類とほぼ同じ数値を示す。

II類は、権現山2号墓がN-24° - E、三ノ耕地1・2号墓がN-32° - Eで、塩1号がN-37° - W、塩2号がN-45° - Wと北を分けて2群に分かれる。

III類は、石葺B8号がN-54° - E、村後がN-70° - E、志渡川4号がS-61° - E、中耕42号がN-36° - Eと、その方位バラツキが目立つが、前面溝の確認されていない中耕42号墓を除くと、Eを中心に65度の範囲に収まる。

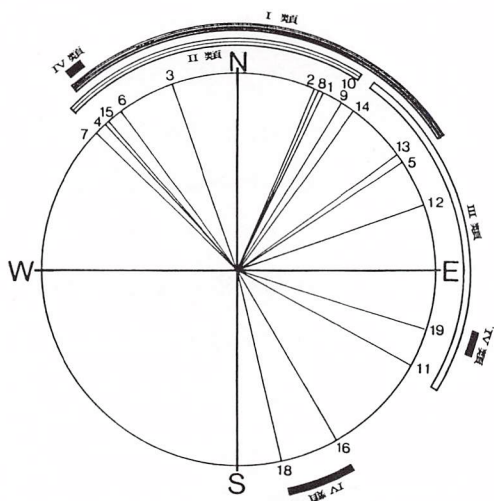
IV類は下道添2号墓がN-41° - W、塚本山38号がS-30° - E、塚本山14号がS-72° - E、塚本山33号がS-12° - EとIII類よりバラツキが目立ち、北方位の意識は見られない。これらは前方部としての認識すらなく、ブリッジは単なる墓道として意識されていたようである。I類・II類以外は、在来の墓制の強い伝統のもとに、その方位を規定されているものと考えられる。

\*遺構の年代と変遷（2・5図） ここで扱う遺構に伴う土器の年代については、本館が調査に当たった成果を「研究報告」（註27）に利根川章彦氏が、『埼玉県古式古墳調査報告』（註28）で坂本和俊氏が一部ふれており、おおまかには、これらに従い論を進め、遺構の変遷を把握していきたい。

I類の鷲山古墳には、焼成前に底部と口縁に円孔を持つ壺と埴、それに面部に2段の竹管文を施す手焙形土器が見られる。埴形土器を北作1号墳（註29）のものと同様の手焙形土器を、弘法山古墳（註30）に類似したものとする、廻間Ⅲ式1段階とすることができる。

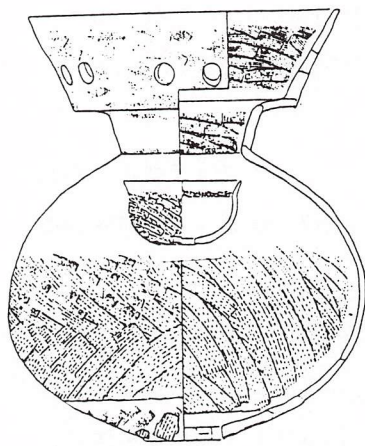
山の根古墳からは、括部から、坏部が深く脚部の高さと同値を示す2段円孔の高坏が出土している。これは、口縁部が内湾せず直線的に開き、外端部に弱い稜を有する。欠山期の口縁内端部のような稜は描かないが、大型有稜高坏として坏端部にシャープさを保持している。脚部が大きく開き、千鳥式穿孔や口縁端部の特徴から、廻間Ⅱ式4～Ⅲ式1段階とすることができる。

4図 遺構の主軸方位

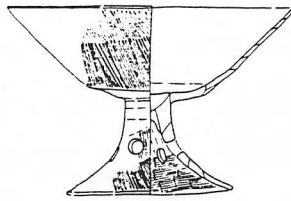


諏訪山29号からは、大廓式土器、有段口縁壺形土器、器台形土器などが出土している。壺形土器は、口縁外端部に面を持ち、頸部に三角凸帯を貼付け、口径が胴径を凌駕する口縁の発達した形態を示す。焼成前の穿孔である。器台脚は内湾し薄く、端部はシャープで、外面は横篋磨きを施す。壺形土器に口縁の装飾や三角凸帯にキザミが見られないことから、茂原愛宕塚古墳（註31）のものより後出とし、器台はやや古くなるが、廻間Ⅲ式2段階・布留1式平行期としておく。I類の時期は、廻間Ⅱ式4～Ⅲ式2段階とすることができる。

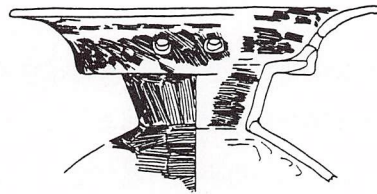
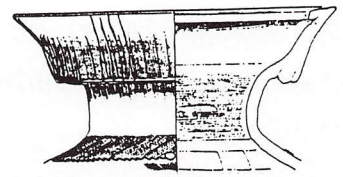
II類の塩1号には、焼成前穿孔の有段口縁壺形土器



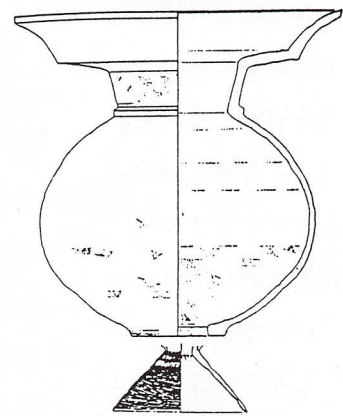
鷺山古墳



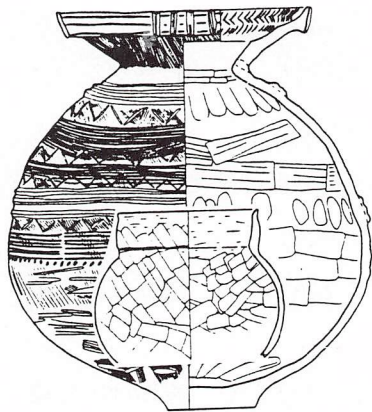
山の根古墳



塩1号墳



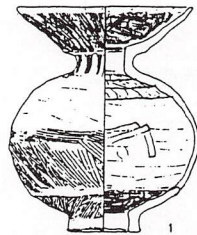
諏訪山29号墳



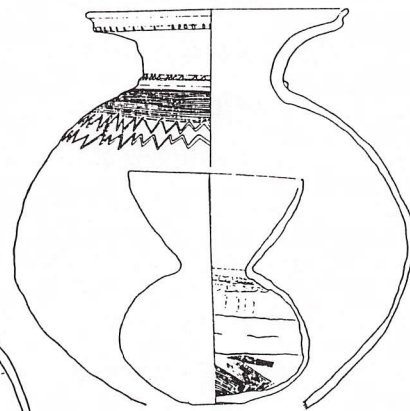
志渡川4号墓



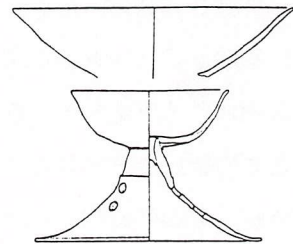
塩2号墳



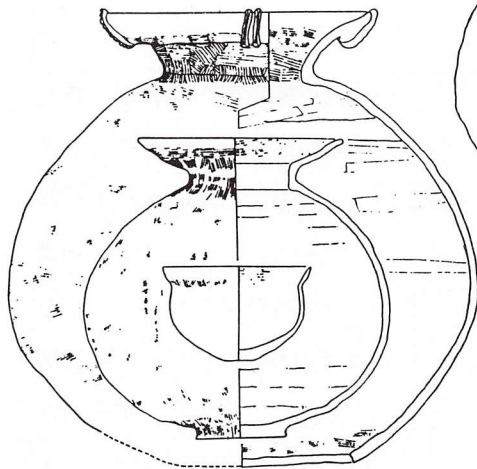
権現山2号墳



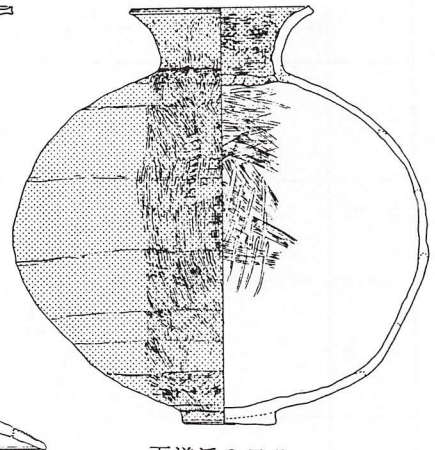
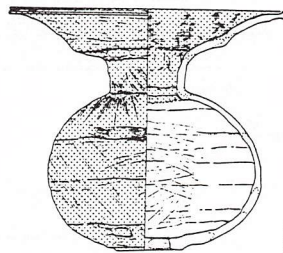
村後墓



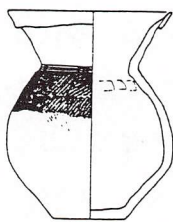
塚本山14号墓



塚本山38号墓



下道添2号墓



塚本山33号墓



5図 遺構出土土器図

が、後出の塩2号には、壺と鉢形土器がある。塩1号の壺形土器は、鷲山古墳の壺と同様に口縁に円孔を設け、頸部は諏訪山29号より長く発達しているが、熊野神社古墳の有段口縁壺形土器ほどではない。東海との比較資料に乏しいが、廻間Ⅲ式3～4段階としておく。

権現山2号墳には、焼成前穿孔の有段口縁壺形土器とパレス壺がある。パレス壺は連弧状の波状文を肩部に施している。これを廻間遺跡のSB49（註32）に類例を求めれば、廻間Ⅱ式2段階前後に位置付けることができる。

三ノ耕地1号墳からは、大型有稜高坏が見られる。坏部は深くやや内湾し、内端部に稜線を描くシャープな造りを示し、脚部は幾分張りぎみで裾で開き、4孔2段透かしである。これよりすれば、廻間Ⅱ式2段階前後とされ、明らかに山の根古墳の高坏より古く編年される。三ノ耕地2号墳は、その占地から1号の後に構築されたものである。

Ⅲ類の南志渡川4号墓にはパレス壺がある。口縁内面に、乱れてるとはいえ3段の羽状文、肩部と胴部に3条の凸帯、さらに山形文と横線文を交互に4回施す。口縁には4単位の棒状浮文を付け、いまだ下膨れの器形を保っている。これより、廻間Ⅱ式3段階前後とされる。

村後遺跡には、退化したパレス壺、小型壺などがある。頸部に凸帯を持つとはいえ、すでに三角を呈することなく、山形文も乱れている。廻間Ⅲ式3～4段階としておく。

石葺B8号墓には（2図）坩形土器がある。口縁が高く体部肩が張り底が上がり、外面は縦方向の丁寧な篋磨きを施し、古相を示す。廻間Ⅲ式2～3段階としたい。

中耕42号墓からは（2図）、大型高坏、装飾器台、小型器台などが出土している。高坏は、口縁端部が丸く収められ外方に大きく開く。山の根古墳のものと比べると、後出的要素が多い。装飾器台は脚に3孔2段、坏部に三角と円孔透かしの両者がある。廻間Ⅲ式2段階前後としておく。Ⅲ類は、廻間Ⅱ式3～廻間Ⅲ式4段階まで存続したことがわかる。

Ⅳ類には、下道添2号墓がある。有段口縁壺、複合口縁壺、素口縁壺、小型高坏、器台など畿内系色彩の強い土器が見られる。有段口縁壺は外面に明瞭な稜をなし、口縁端部は上下に鋭くつまみだされ、その外面に凹部が造られる。素口縁壺も口縁端部は同様な造りを成す。小型高坏は浅い坏

と、内湾ぎみに大きく開く脚端にヘラ文様が見られる。これらの要素は纏向辻4号土壇下層（註33）に見られる。布留式古段階、廻間Ⅱ式4～廻間Ⅲ式1段階に比定されよう。

塚本山38号墓からは、複合口縁で棒状浮文をつける底部穿孔の壺に、坩形土器の祖形と考えられる鉢形土器がある。鉢は、纏向遺跡鉢D類に属し、鷲山古墳より古相を示す。廻間Ⅱ式3

6図 遺構変遷図

	廻間Ⅱ式				廻間Ⅲ式			
	1	2	3	4	1	2	3	4
I 類				鷲山古墳 山の根古墳			諏訪山29号墳	
II 類		権現山2号墳 三ノ耕地1号墓 三ノ耕地1号墓					塩1号墳 塩2号墳	
III 類			南志渡川4号墓			石葺B8号墓 中耕42号墓	村後	
IV 類		塚本山38号墓		下道添2号墓 塚本山14号墓 塚本山33号墓				

段階とする。

同14号墓からは、口縁端がシャープで大きく開くものと、3孔2段透かしで坏の小さい高坏がある。廻間Ⅲ式1段階前後とする。同33号墓には、複合口縁で頸部に簾状文、肩に縄文を施す在地産の壺、脚部のやや張った小型高坏がある。年代決定の要素に欠けるが、廻間Ⅱ式4段階としておく。Ⅳ類は、廻間Ⅱ式3～廻間Ⅲ式1段階とすることができる。

#### 4) まとめ

これまで諸要素の分析と若干の考察を進めてきたが、さらに論を加えてみる。

前方後方型周溝墓に関連して、石葺B遺跡や中耕遺跡などから導き出せることは、その属する階層性は、遺構の規模と形態から少なくとも3段階以上に分れる。石葺B遺跡では、その主軸の方位と配置から、それぞれが3時期（3累代）にわたり構築されていた。そして、群内での前方後方型周溝墓の出現時期は当初ではなく、それでも早い時期に、その最高権力者の墳墓として成立し、次期に後継者が続いている。これは南志渡川遺跡でも同様な事象を示す。

一方、中耕遺跡などでは、群の終盤に大型方形墓を含む前方後方型周溝墓が出現している。これらからすると、決して、前方後方型周溝墓の被葬者が頂点に立って、突如入殖したものではない。このことは、中耕遺跡の在地系土器の在りかたや、四隅の切れる方形周溝墓の存続時期、加えて、Ⅱ類に匹敵するような占有面積451㎡の大型方形周溝墓の広面9号墓が、在地の伝統的形態に固執していることからわかる。たとえ、中耕42号墓が前方後方型周溝墓を採用しても、右偏りの墓道形態を採用せざるえない、伝統的規制が強くはたらいっていたことを窺わせる。

調査された前方後方墳の後方部は、全て主軸に沿った長方形である（3図）。しかし、Ⅲ類の前方後方型周溝墓にあつては、横長台形・横長長方形・長方形が存在する。Ⅰ類の前方後方墳とⅢ類の前方後方型周溝墓との中間階層にあるⅡ類には、横長長方形・長方形・方形がある。Ⅲ類からⅠ類への形態的変遷は、確実に縦長長方形と左右対称の規格化へと思考されている。横長方台部が複数並列埋葬を予定したのに対し、縦長長方形は単独埋葬が想定され、支配者層が専制化の方向へと歩みだした事象とされ、ここに階級制の成立をみるものとする。

ところで、農耕技術の発展段階によって可耕地は異なる。弥生後期の磨製石斧の激減は、とりもなおさず、鉄器の普及を意味する。弥生中期の強湿田中心の限定された耕地から、後期の半湿田やより生産性の高い自然堤防上の乾田への耕地の拡大は、自ずと土地の占有意識の高揚を促進することになる。この経済基盤の基層こそ葬制に反映するものである。

東国の弥生中期の方形周溝墓の規模には、さほどの格差は見られない。これが顕著に現れるのは後期も後半になってからである。ここで扱う時期もこの延長にある。

前方後方型周溝墓の平均的全長は、前方後方墳のその2.2倍で、占有面積は実に5倍である。方形周溝墓の東川端1号墓と前方後方墳とでは12倍である。盛土の容積は、Ⅳ類の塚本山14号墓と山の根古墳とでは実に10.6倍で、東川端1号墓とはなんと16.1倍である。方形周溝墓を世帯共同体の有力家長層のものとするれば、55mの前方後方墳の被葬者は、少なくとも16以上のこの家長層を束ねたことになる。ちなみに、比企においては、吉見丘陵に山の根古墳、松山台地に天神山古墳、高坂台地に諏訪山29号墳が築造されており、それぞれが至近距離にある。山の根古墳と諏訪山29号墳

の間に、仮に天神山古墳が編年されるとすれば、吉見町を含めた東松山市域100km<sup>2</sup>で、50mクラスの前方後方墳が存立していることになる。

さて、前方後方墳は前方後方型周溝墓から、在地で系統的に発展成立するものであろうか。両者の規模こそ違え、前方部の発達した前方後方型周溝墓がある。

南志渡川4号墓は前方部が後方長の75%で、時間的にこれに続く鷺山古墳のそれは58%である。鷺山古墳は、纏向型前方後円墳の1:2に近く、南志渡川4号墓の前方部は、発達した前方後方墳の比率である。距離的にも近い両者において、南志渡川4号墓の被葬者の系譜が鷺山古墳を築造したのであれば、当然これに近い比率の墳形を採用するはずである。まして、後の前方後方墳の形態が、南志渡川4号墓的比率であれば、なおさらのことである。形態的には、南志渡川4号墓（前方後方型周溝墓）から鷺山古墳（前方後方墳）への系統的発展はなさそうである。このことは、鷺山古墳の土器がより畿内的であり、その墳形にバチ型を採用していることと関連しようか。

同様な事象として、三ノ耕地1号墓と山の根古墳の関係も注目される。三ノ耕地1号墓は山の根古墳の眼下の自然堤防上に立地し、土器編年上も近接する。前者の前方部は88%でかなり発達しており、後者は63%でこれに比べて前方後方墳のものは短い。もっとも、1号墓に続く三ノ耕地2号墓は63%で、山の根古墳と同値を示す。これよりすれば、三ノ耕地1号墓から山の根古墳への発展は形態的には説明がつかない。むしろ、2号墓で前方部も規模も縮小した段階のものから、山の根古墳は成立したのであろうか。三ノ耕地2号墓の土器論の検討を待つて結論を導きたい。

縮小現象の事例として、破鏡を出したことで著名な高部遺跡（註34）がある。高部32号墳から30号墳への変遷でも、79%から51%と減じている。高部30号墳は神門4号墳に近い時期で、纏向型前方後円墳の1:2の数値を示す。このことは、箸墓古墳以前の政権を容認すると、これと東国との関係を理解する上で無視できない事象である。

バチ型構造を示す鷺山古墳や山の根古墳の前時期の墳墓との関係は、3世紀後葉の社会において、基層文化としての前方後方型周溝墓と、新たな社会変革をもたらすことになる政治機構の、2層がとりなす現象ともいえる。

土器の検討から、前方後方型周溝墓と前方後方墳は、廻間Ⅱ式2段階からⅢ式4段階にかけて構築されていることが判明した。畿内の編年でいえば、庄内式新段階から布留式中段階にかけてである。山の根古墳を廻間Ⅱ式4段階に、さらに、前方部の極めて発達した、全長48mの三ノ耕地1号墓を前方後方墳とするならば、その時期は廻間Ⅱ式2段階（庄内2式）（纏向3式古）に比定されることになり、このことは、北武蔵にも確実に3世紀後半には前方後方墳（古墳）が成立していたこととなる。

遺構からの土器は、下道添2号墓のように畿内系が、中耕遺跡のように在地系の多いものがあるが、当然、基層文化遺物として東海系と北陸系土器がこれに加わる。東海系土器の流入は弥生後期を通していえることであり、社会変革の活発化した3世紀後半には、当然土器の動きも頻繁になるはずである。これをもって、武力集団を含む人間の大量移動を想定するのは危険である。

要は、狗奴国の基層文化としての各種方形周溝墓や前方後方型周溝墓の頂点として、Ⅱ類の群集型が在地の中から醸成されるのであるが、これが前方後方墳として独立するには、外因的要素を



めた諸要件が加わる必要がある。その要因として、内部的には、中耕遺跡の124基以上の方形周溝墓の存在が示すように、活発な耕地の拡大があり、そこでは鉄器の確保と技術者が要求される。これに答えるべく対外交渉にあたる首長の出現が望まれることになる。これに加え、3世紀後半は、東海勢力の加わった畿内政権の再編成時期にあたり、早くから伊勢湾文化に馴染んでいた東国もこの動きにさらされることになる。在地族長が内因的外因的要求に立ち向かった結果、首長としてその階級制に高揚した事象が、まさに、前方後方墳（古墳）の成立である。

さて、これまで墳墓の形態の規格化、特に後方部の長方形化・前方部側線の中軸線中央または奥辺（B）への集中化と左右の対称性、また、主軸方位の北への集中化、規模における全長や盛土の増大化などをもって古墳成立の事象としてきた。墳墓の規格化は、勿論、葬送思想の高揚化へと進展するわけであるが、加えて、その共有性は首長層の同盟連合意識を醸成し、一層首長間の物流が容易になり、盛んになったものと考えられる。これにより、もたらせることになる人的交流による技術や物資の移動、これに伴う文化や思想の影響は大きい。これを一手に首長が掌握し、地域開発や支配に利用したものと考えられる。古墳築造に際し、ここに労働提供する民衆は、その対価として農具などを貸与され、一部再分配として還元されるとはいえ、古墳築造のうまみは、交易権を掌握することで常に首長層が享受していたのである。ここに、階級制の成立と意義がある。

首長権の性格や構造は、副葬品や主体部が不明な今日、論述しにくい。それでも、気掛かりな事象がある。それは、前方後方墳に隣接して方墳らしきものが対で存在する現象である。

I類の山の根古墳には山の根2号墳が、鷲山古墳には前方部主軸線上に古式土師器片を出土した10m程の古墳が、諏訪山29号墳には、後方部延長線上に浅間神社古墳がある。

II類の塩1号墳の後方部後方には方墳が、塩2号墳の前方部の前方には方墳が築造されている。これらの古墳については調査例がなく前方後方墳との時期的検討ができない。ところが、山の根1号墳と2号墳の規模をみると、1号墳の後方部の長辺33.6m、短辺26.2mに対し、2号墳は長辺28m、短辺22mの長方形を呈し、1号墳後方部の各辺の83%を占め相似形を成す。このことは、2号墳は1号墳の後方部と同一規格のもとに構築されたものとされる。

時期に関しては、鷲山古墳のそれが古式土師器片を伴うことを重視し、墳形に関しては塩2号墳の例を加えると、前方後方墳と対になる墳形は方墳で、時間的には両者は近く、同一規格を示すことから、前方後方墳の被葬者と極めて関係の深い人物の墳墓であることが想定される。

このような配置を示す古墳群としては、本県だけの事象ではなく、千葉県駒久保6号墳と方墳（註35）、大井戸八木15号墳と方墳（註36）や栃木県茂原愛宕塚古墳・大日塚古墳（註37）にもあり、各地に散見する。これは、東国における前方後方墳成立期の共通した現象であろうか。両者の調査を待つて結論を出すべきであるが、危険を冒し、あえて触れてみる。

まず、対の現象は、次的にはIII類の先に述べた前方後方型周溝墓の石碁B8号と9号墓に見られる。これは、前方後方型周溝墓を導入した際に、既に両者が一体で支配構造を成す機能を付加していたとも想定される。この墳形が方形周溝墓より、より高次元の機能を有した墓制として導入されたことを意味しようか。

対の機能として、卑弥呼と男弟の関係を想定している。ようは、支配機構の問題である。弥生時

代の支配構造にあつて、祭りの機能には大きいものがあつた。ところが、古墳時代にあつては、首長の集団から期待される機能は大きく変わり、首長連合の証しとしての前方後方墳を造り、結果として対首長間の交易を体現する機能にたよらざるをえない社会状況になつた。ここに、祭りと政りごととに大きな変化が生じ、より政治的機能を要求されるにいたつた。たぶんに方墳の被葬者は祭りに、前方後方墳は政りごととしての機能を発揮し、地域的政治社会を体現リードしていったものとみられる。

祭りと政りごとの体現者の埋葬施設として方墳と前方後方墳とを考えたが、前方後方墳に両者が埋葬される可能性もある。これは、副葬品の内容によって分離が可能であろうが、良好な資料に恵まれない。出自の異なる両者の場合は前方後方墳と方墳として存在し、より前方後方墳の被葬者と親縁関係が深い人物が祭りを司つた場合には、同一古墳に埋葬される事例もあつたものと予測している。この対の関係は、前方後円墳の出現によって解消されるようである。このことは、いわゆる『前方後円墳体制』（註38）による政りごとの性格の強い新たな墓制の創出にある。これらの事象からも前方後方墳の性格をより在地的で政治性の未成熟な墓制として規定することができる。

最後に、各地の前方後方墳成立後の墳形と規模を取り上げる。児玉地域では、鷲山古墳に続く古墳は径47mの物見塚古墳とされているが、いまひとつ墳形が明らかでない。この地域では、少なくとも3期から7期までの前方後円墳は今のところ確認されていない。この間の4世紀後半から5世紀前半にかけて、菱雲文縁方格規矩鏡を出土した径50の長坂聖天塚古墳（註39）・直刃鎌を出土した円墳の前山2号墳（註40）・格子目タタキの埴輪を伴い、葺石が見られる径67mの金鑽神社古墳（註41）・同様な埴輪と直刃鎌の石製模造品を持つ径65mの公卿塚古墳（註42）・径60mの生野山將軍塚古墳（註43）と、大型円墳が続いて築造される。確かに70～60m級の円墳の盛土量は100m級の前方後円墳のそれに匹敵するものであるが、ついに前方後円墳は現れない。この現象を、格子目タタキや生野山將軍塚古墳の幅広い竪穴式石室の形態、金鑽神社古墳の箱式石棺や大型の石製刀子から渡来系集団の関わりを強調する立場と、畿内政権による墳形の規制（註44）とする両者の考えがある。本論で扱っている時期よりやや時代が下がつた事象の解釈であるが、これは、在地勢力が前方後円墳を含め墳形を採用する際の、在地共同体に対処する内的要因と外的政治状況を現しているものと考えられる。

一方、比企地域にあつては、諏訪山29号墳の後に、全長61mの諏訪山古墳（註45）が3期の前方後円墳として出現するようである。続く4期には初出の埴輪と葺石を持つ、武蔵最大の帆立形前方後円墳である全長84mの雷電山古墳（註46）が、その後B種ヨコハケを持ち短甲が出土したとされる大型円墳諏訪山33号墳（註47）が構築される。加えて、全長115mの野本將軍塚墳（註48）が埴輪を持たないことと、その墳形から、雷電山古墳以前に位置するものであれば、北武蔵においては、4世紀から5世紀中葉にかけての比企の優位性は明らかである。

前方後方墳成立に引き続き前方後円墳が構築されたここに、前期比企地域政権とも言うべき政治構造の醸成が見られる。これを受け、辛亥銘鉄剣が示す河内政権の影響の強い後期埼玉政権が成立するものと考えられる。稲荷山古墳成立の要因を含め、両政権の関係は北武蔵の古代史上重要課題であるが、本論から外れるので別稿で触れることにする。

本題の前方後方墳成立の要因については、必ずしも十分な論証はできなかったが、武蔵・相模を見渡しても、前方後方墳の集中するのは比企地域である。そして、ここに前期比企地域政権の存在すら想定させた。児玉地域と異なり、いち早く前方後円墳が出現するのもこの地である。遺構の数から推測するのは早計かと思われるが、前方後方型周溝墓の数と前方後方墳の数は、必ずしも比例するものではなく、その系統的発展の可能性は少ない。前方後方墳成立の要因は、初期畿内政権の動向に加え、すぐれて、在地勢力の内外に対する政治的判断によるものとされた。勿論、墳形の採用にあっては、弥生後期において東海からの基層文化があつてのことである。

本稿を草するに当たり、弓 明義氏には三ノ耕地遺跡、鳥羽政之氏には石蒔B遺跡、宮島秀夫氏には天神山古墳の資料の便宜を図っていただいた。また、古式古墳に関しては坂本和俊・田口一郎両氏及び諸墨知義氏に数々の教示を賜った。ここに改めて深く感謝致します。

#### 【註】

- 註1 寺沢 薫 1988 「纏向型前方後円墳の構造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV
- 註2 大護 八郎他 1956 「大宮公園弥生時代竪穴住居跡発掘及び復元報告書」埼玉文化会館
- 註3 横川 好富 1963 「北葛飾郡庄和村権現山遺跡」台地研究N013 台地研究会
- 註4 国学院大学考古学会 1964 「弥生終末期文化展」『若木考古』73号 国学院大学考古学会
- 註5 佐藤 忠雄 1979 「後榛沢遺跡群（石蒔A・B遺跡）の調査」『第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他
- 註6 坂本 和俊 1981 「埼玉の前方後円墳」『歴史手帳』9巻5号
- 註7 増田 逸朗他 1986 「諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 註8 坂本 和俊 1986 「鷲山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 註9 利根川章彦 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』埼玉県立さきたま資料館
- 註10 註9に同じ
- 註11 面径10.5cmの仿製鏡。6個の花文、外区は櫛歯文帯、有節平行線帯、鋸歯文帯の広い平縁の1/2程の破片。破鏡であるかは不明。他に刻み目のある銅釧3点がある。なお、この形態の銅釧は一般的に後期古墳から多く見られるものである。
- 註12 青木 義脩 1974 「大久保古墳群」『浦和市史』1巻・考古資料編
- 註13 新井 端 1995 「埼玉県大里郡江南町塩古墳群」日本考古学年報46 日本考古学協会
- 註14 註13に同じ
- 註15 笹森 健一 1983 『埋蔵文化財の調査（V）』郷土資料第29集 上福岡市教育委員会
- 註16 若松 良一 1991 「根岸稻荷神社古墳」『古墳詳細分布調査概報1』埼玉教育委員会
- 註17 岡本 幸男 1982 「美里町志渡川遺跡群の調査」『第15回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 註18 細田 勝他 1984 『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第38集
- 註19 坂野 和信 1987 『下道添遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第67集
- 註20 増田逸朗他 1977 『塚本山古墳群』関越自動車道関係埋蔵文化財発掘報告VI 埼玉県教育委員会
- 註21 赤塚 次郎 1992 「東海系のトレース」『古代文化』44-6 古代学協会
- 註22・註23は註20に同じ
- 註24 赤塚 次郎 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 註25 杉崎 茂樹他 1994 『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第125集
- 村田 健二 1990 『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第89集
- 富田 和夫 1994 『稻荷前遺跡（B・C）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第145集
- 註26 担当者の弓 明義氏より現地説明会資料の提供及び土器の実見、遺構の説明も受ける。

- 註27 利根川章彦 1995 「吉見町山の根古墳の年代について」『調査研究報告』8号 埼玉県立さきたま資料館
- 註28 註8に同じ
- 註29 糸川 道行 1994 『沼南町北ノ作1・2号墳発掘調査報告書』千葉県文化財保護協会
- 註30 直井 雅尚 1993 『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市教育委員会
- 註31 久保 哲三 1990 『下野茂原古墳群』宇都宮市教育委員会
- 註32 註24に同じ
- 註33 石野 博信他 1976 『纏向』樞原考古学研究所
- 註34 小沢 洋 1995 「高部古墳群」『前期前方後円墳の再検討』埋蔵文化財研究会
- 註35 酒巻 忠史 1991 「駒久保古墳群の調査(1)」『研究紀要IV』(財)君津郡市文化財センター
- 註36 能城 秀喜 1993 「大井戸八木遺跡」年報No.11 (財)君津郡市文化財センター
- 註37 註31に同じ
- 註38 都比呂志 1989 「古墳が造られた時代」『古代史復元 6 古墳時代の王と民衆』
- 註39 菅谷 浩之他 1975 「美里村長坂聖天塚古墳の調査」『第8回遺跡発掘調査報告会発表要旨』  
埼玉考古学会他
- 註40 小久保 徹他 1978 『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集
- 註41 佐藤 好司他 1986 「金鑽神社古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 註42 柳田 敏司 1963 「本庄市公卿塚と石製模造品」『埼玉考古第1号』埼玉考古学会
- 註43 柳田 敏司 1964 「埼玉県児玉郡生野山將軍塚古墳発掘調査概要」『上代文化』第34号  
国学院大学考古学会
- 註44 小野山 節 1970 「五世紀における古墳の規制」考古学研究第36号 考古学研究会
- 註45 金井塚良一 1968 『諏訪山古墳群』考古学資料刊行会
- 註46 佐藤 好司 1986 「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 註47 若松 良一 1987 「比企の大首長と武蔵国造」『諏訪山33号墳の研究』
- 註48 金井塚良一 1979 「比企の前方後円墳—北武蔵の前方後円墳の研究(1)—」  
埼玉県立歴史資料館研究紀要 第1号